

令和3年度 調査研究事業（研究報告）

1 施設名

天使虹の園

2 研究テーマ

障害の有無、発達や、国籍・ルーツの違いなど多様な子どもたちのインクルーシブ保育において、それぞれが主体的に生きるための支援を学ぶ。

3 研究内容

（1）実施期間

2021年4月～2022年3月

（2）講師の所属・役職・氏名等

社会福祉法人 大阪市障害者福祉・スポーツ協会 大阪市更生療育センター
作業療法士 布市敦子先生

（3）研究のねらい

クラスの担任が、作業療法士という専門的な視点から得られるそれぞれの子ども
の特性をよく理解し、発達に応じたタイムリーな支援をすること、また支援
が必要な子どもの保護者に対しての援助方法を具多的に学ぶことにより、子
どもも保護者も、そして職員も育ちあっていく。

（4）研究対象児童

0歳～2歳児

4 実践内容

【0才児の場合】

乳児の体幹の弱さが咀嚼や嚥下などの食事面に影響を及ぼしたり、スプーンを持つ手首や指先の動きにつながることを具体的に学び、正しい座位を維持するために、椅子等を補強、補助する重要性など環境面を含めて援助方法を具体的に学んだ。また保育士との愛着関係を育てられるような子どもとのやりとりを具体的に学び、食事援助の間も意識して働きかけた。

【1歳児の場合】

①1歳半健診時にフォローがついた発達に遅れがある子どもに関して、実際に保護者とも面談を行い本児に必要な働きかけを共有することで、園と家庭との両輪で支援を行うことができた。また同時に保護者の不安にも寄り添い、子どもにとって何が最善の利益かという同じ目的をもつことにより、保護者支援にもつながった。②発達に課題のある低体重出生児の双子に関して、成長を促し生活の流れを不安なく行うための具体的な遊び方や支援方法を学んだ。③低体重出生児であり、食事の段階が進まず、咀嚼力もなかなか育たない身体の発達が遅れている子どもで、生活リズムがなかなかつかない家庭への働きかけを具体で考えた。また本児は単語も全く出しておらず、理解力をのばし、発語に繋がる働きかけも学ぶ。

【2歳児の場合】

実際に療育手帳を持っている園児（2名）への、生活の支援方法を学ぶ。それぞれの特性に応じた個別の働きかけを考え、食事の支援や遊びへの関わり方、またクラスでの健常児と当該児の関わりを「共に育つ」というインクルーシブな視点で作りに上げていく。



5 研究のまとめ（研究成果）

【0歳児の場合】

家庭において食べ物のローテーションが決まっており、柔らかすぎるものばかり食べているため体幹が弱く、ボディイメージが低いような乳児は、食事中、座位が前にずれることで左右に揺れたりイライラして立ち上がったたり余計に食事が進まない。まずは上半身を固定するためにお風呂マット等のウレタン素材のもので椅子と背中、両脇の間を埋め、座面に滑り止めマットを置く。また本児と保育士のやりとりの中で、食事は楽しいというイメージを育て、励まされて意欲を持ち、好みではない食材も食べられるようにしていく。食材の形態を一口でかみちぎるものにして経験を積むことで、咀嚼力をあげていく。また、ボディイメージについては、本児が体当たりしてきた際にギュッと抱きしめることで心地よさを感じ、体を意識できるようにしていく。また家庭にも咀嚼の大切さを伝え、食材のバリエーションを増やすようにアドバイスした。同時に体幹を使うような粗大遊びも、より取り入れていく。以上の支援を続けていくことにより、子どもが主体的に食事をする姿勢が出てきており、体作りも進んでいる。

【1歳児の場合】

①まずは保育士が健診時のフォロー内容について、その支援方法を具体的に学んだ。パーソナルスペースが広く、横を友達が通り抜けるだけで嫌がって叫び声をあげる場合などは、本児が状況を理解する力が弱く、いつも不意に物事が襲い掛かってくるようなイメージを持っているのだということを理解し、予め丁寧な声掛けをしたり状況を説明してあげたりすることと、同時に意図的に体に触られる経験を積み、心地よさや安心感を育てていくことが大切だと学んだ。また、当該の保護者と面談をすることで、家庭内で困っていることや保護者が不安に思っていることを共有し、園での姿も共有することで、今後の本児への支援に関して共通理解のもと進めていくことができていく。②双子の低体重出生児で、発達に課題がある子どもに関して、理解力をあげるためにやりとりをルーティーン化し、ジュスチャーをふまえて生活の一つ一つの動作ができるように支援した。知的に低いため、同年齢の子どもの遊ぶ玩具では遊ばず全部とところかまわず放り投げるため、保育士が傍に1対1でつき、集中して遊べる時間を15秒から1分ずつ増やしていった。そうすることで少しずつ遊べる姿が増えてきており、また食事のスプーンのすくい方も良くなってきている。③低体重出生児であり、咀嚼が弱く満2歳を超えても離乳食でないと食べられない状況で、保護者も食に関しての意識が低く、ミルクをなかなか止められなかったり、就寝時間が23時を回ったりする家庭であったが、園で形状を食べやすいものに変え、食事中に頭部や背中を壁で安定させる姿勢で午前睡を続けながら支援してきた。遊びにおいては体幹を鍛えながら集中力を増すために、一人遊びの時のしゃがみこむ坐位を安定させるためにお尻の下に補助具（牛乳パック利用）を置き、骨盤を支えるようにした。また玩具を噛むことが多くなってきたので、カミカミ玩具を本児用に購入し、噛めるようにした。家庭への働きかけは依然なかなか難しい。

【2歳児の場合】

療育手帳（B2）を持っており筋肉、関節がやわらかい子どもは、歩行時にふらふらするので必ず手をつないで移動したり、壁側を歩き、直線の感覚を高めるようにすることを確認した。またいつも左手側を床について寝転んで絵本を見ていたりすることが多いので、両手の協応を促すためできるだけ起こして両手を使うことを意識できる遊びに誘いかける。また段ボール箱を利用して専用の椅子を作り、足を延ばして座る姿勢を安定させる練習をしていく。また自分では着脱ができないため、着脱していることに注目を促し、その都度声をかけて着脱を援助してきた。保護者との面談を重ね、本児は来年から療育施設に通うことになった。また、同じく療育手帳（B2）を持っており、全く水分を摂れず食事もおにぎり状にしたものに海苔を巻いたもののみしか食せない子どもに関して、マグマグでポカリスエットを飲むことから始め、ストローの形状などに関しても家庭と連携をとってきた。また体幹が弱く、昼寝が辛く短時間で起きてしまうので、本児の体に負担の少ない体勢のアドバイスをもらい対応してきた。本児の生活には1対1の支援が必要だが、安心して園生活を送ることが出来ている。またクラスの他の子どもたちは、保育士の働きかけをよく見ており、支援が必要な友達への援助や関わり方も自然と「仲間意識」のもとで本児たちの意思を尊重して、いろいろなことを当たり前のように自然に助けてあげる姿が見られている。

【総括】

生活をする力（食事・着脱・遊び）を育てる上には身体の成熟は必須であり、それを育てるための環境（人的・物的）はとても大切であるが、家庭との連携も重要であると感じた。担任の保育士のみならず、作業療法士というプロが入ることで、保護者支援がしやすくなったと感じる。

6 課題

どの家庭においても、保護者が子どもの発達の違いを受け入れにくかったり、また気づいていてもなかなかそのために食事の内容を見直したり、睡眠リズムを整えたりするような家庭での生活リズムを変えられなかったりすることが多くあると感じる。また、園では積極的に支援方法を考え実践していくが、保護者への働きかけが十分できなかったり保育士がそれに困難を感じている現状があると感じる。

令和3年度 調査研究事業（研究報告）

1 施設名

ありんこ保育園

2 研究テーマ

「保育士が研修することにより、発達障害のある子どもや気になる子どもの成長を理解する。」

3 研究内容

（1）実施期間

令和3年9月29日～令和4年3月25日

（2）講師の所属・役職・氏名等

一般社団法人相談支援研究所

所長 青木 道忠氏

（3）研究のねらい

保育士が発達について学ぶと同時に、講師の助言を受け実践することで、こどもたちのより良い成長を促していくことができる力量をつけることを目標とする。

（4）研究対象児童

1歳児、2歳児クラスの園児

（5）指導計画

別紙参照

4 実践内容

初めに1歳児クラス、2歳児クラスの担任が保育の中で気になると感じる子について様子を出し合い、講師に保育の観察をしていただいたうえで助言をいただいた。

その後の会で、発達についての学習とともに、保育の中でどのようなことを大切にしたらいいかを学んだ。

後半は1歳児担任が2名、2歳児担任が4名実践報告をした。どの報告も助言を受けて大切にしてきたことや、変更してきた点があり、その実践の中でこどもたちがみんな良い方向に変化し成長してきていることがわかった。実践報告について担任の考えを発表した後、講師からの助言をもらい保育への確信を深めることができた。



5 研究のまとめ（研究成果）

2歳児 事例1

本児は加配保育士がついて保育している。好きな色や好きな玩具があっただけの子がさわると怒ることが多かった。最近では急激に言葉が増えてきて理解力が成長していることがうかがえた。保育士は講師の助言を受け、本児の気持ちを肯定的に受け止め、様々な場面で「お兄ちゃんになってきたから、我慢できるようになったんやなあ。」とか簡単なお手伝いを頼んで「ありがとう。たすかったわあ。手伝ってもらえてうれしい。」というような言葉かけを多くしてきた。

ある日、いつもと違ってお母さんが送ってきた日、「いやや、ママがいい」と自転車から降りようとしなない。「みんな待ってるよ」などと声掛けしたり、本児の好きなカードを見せたりしても降りようとしなない。そのうちポスターに書いてある猫を見つけて「ねこや」と言葉を発したので、保育士は気持ちが切り替わったのを感じた。そこで「おいで」と声をかけると保育士に抱っこされて保育室に行くことができた。

担任の考察

大好きなお母さんと来たので降りられなかったが、もっと本児の好きなものを持って迎えにいくとよかったと思う。

講師の助言

お母さんと来る時からどのような背景があるのかを知り、「いや」の奥にあるものは何かを考えてみるのが大事だ。「ねこ」だけで気持ちが切り替わったのではなく、いつも暖かく見守ってくれている担任がいることへの安心感があるからこそ、何かをきっかけに気持ちを切り替えられたのだろう。

気持ちをなかなか切り替えられない子、何か一つのことを好きでほかのことに誘ってもしよとしない子、友達にすぐに暴力的な関りをしてしまう子、言葉が多くいっぱい話ができるが人を傷つけるような言葉も発してしまう子、保育士の言葉かけに注意を向けず自分のあそびを続けている子など、様々な子どもたちがいるが、一人一人の個性に合わせていろいろな取り組みや、保育の工夫などが必要である。

それぞれの子が夢中になれるあそびを準備する、それぞれがみんなの中の一人として認められるあそびを準備する、体を十分に使ってあそぶ、うたやリズムであそぶなど環境面で気を付けることを教えていただき実践した。中でも大切なことは、一人ひとりのことを否定的にとらえず、「さすがお兄ちゃんやなあ。」とか「次はもっとお兄ちゃんになって貸してあげられるなあ」と肯定的に、子どもを信じて話をする。お手伝いの機会を用意してもらってうれしいことを言葉で伝えるなどの保育士の配慮はととても大事で子どもたちの成長に欠かせないことが分かった。

6 課題

今年度はこの研修を受けて、職員みんなが同じ気持ちで保育に取り組むことができた。今後は行動の背景にあるものをより見られるようになり的確な保育ができるよう職員間での話し合いを続けていくことが課題であると考えます。

またこの研修で学んだ保育を今後も継続していくことが重要である。

令和3年度 調査研究事業（研究報告）

1 施設名

大阪市立茨田第2保育所

2 研究テーマ

身近な自然の中で見たり聞いたりしたことを様々な形で表現する。
支援の必要な子どもたちに対してのアプローチを学ぶ。

3 研究内容

(1) 実施期間

令和3年4月1日～令和4年3月15日

(2) 講師の所属・役職・氏名等

こどもの発達相談室あおいとり 室長 藤川典子氏

関西学院大学 教授 栗山誠氏 京都女子大 非常勤講師 小泉昭男氏

(3) 研究のねらい

身近な自然の中で見たり感じたりした事を様々な形で表現する。
昆虫等をゲージで飼い生態を観察し理解を深める。

(4) 研究対象児童

0～5歳児 100名（令和3年5月1日現在）

4 実践内容

こどもの発達相談室あおい通りの藤川典子氏から、「今さら聞けない事」の内容から研修をはじめてもらい、特別支援が必要な子どもに関わらず、白い食べ物ばかりを好む子どもや活動をしたくない子がいると他の子どももしたくないと言い出したらどうするのか、など日々の疑問と一緒に考えて頂いた。その中でそもそもなぜその活動が必要なのかを職員が考える習慣をつけようという事をお話頂いた。その後もクラスに入って頂き具体的な助言を頂いた。関西学院大学の栗山誠氏には子どもの表現活動は大人が「〇〇を作らしましょう」的な誘導ではなく、心が響いた時に何らかの形で表現できるように子どもが夢中になる時間や場所に制限がないようにしていきたい事などの助言をいただいた。小泉昭男氏からは所庭にある樹木や草花、飼っている昆虫などについて、名前を覚えるより、どういう事で遊べるのか、昆虫の好む木などを教えて頂き、木々の簡単な剪定も教えて頂いた。3氏からの研修を受ける事により今まで、当たり前だと思っていたことがそうではなかったり、子ども主導の毎日を模索する基礎が見えてきたのではないかと考える。



5 研究のまとめ（研究成果）

大人からの提案やこの季節にはこれ。という今までの考えを見直し子どもの気持ちが今どこにいるのかを考え大人も一緒に悩んだり迷ったりしながら保育を進めていくようになったのではないかと思います。その結果、今はこれがしたい。と言える子どもが多くなり、それを受容できる大人が増えてきたように思い、大人も子どもと一緒に遊びを面白い事が大切だと感じる事ができるようになったのではないかと考える。また毎日同じ事をしているが、毎日、少しずつ違っていく生活を楽しむ事は大切だと感じう事を感じていけたのではないかと考える。



6 課題

今後、受け持つクラスが変わったり、クラスを組む職員が代わっても同じような気持ちでいられるように気持ちをしっかり持つ事や新しい職員にどう伝えればいいのか。また職員だけでなく子どもや保護者に当保育所の事を理解してもらうにはどうするのか。そしてこの後、定期的に研修や実践を重ね継続していけたり発展していく事が力になるのではないかと思います。

令和3年度 調査研究事業（研究報告）

1 施設名

三明保育園

2 研究テーマ

体の基礎を作る乳幼児期に、子どもの心と体を育む運動遊びについて研究する

3 研究内容

（1）実施期間

令和3年8月28日～令和4年1月20日

（2）講師の所属・役職・氏名等

体育指導講師

長井 篤

（3）研究のねらい

- ・子どもの基礎体力について考え、共通認識を行い、効率良い成果を獲得していくためのプログラム作りを行い、運動遊びの礎を再認識する。
- ・心身のバランスが良く、成長が育まれる運動遊びについて研究し実践をしながら検証していく。

（4）研究対象児童

幼児：3歳児（17名） 4歳児（18名） 5歳児（21名）

（5）指導計画

別紙参照

4 実践内容

●子どもの基礎体力を育むためにはどのような運動遊びと心体へのアプローチが必要か（講義）

(1)基礎体力とはなにか。

(2)生活の中で基礎体力を高める活動とはどんなものか。⇒問題に対して考える機会を作り、向き合っていく。

(3)基礎体力をつけるためのサーキットを考案する。

(4)子どもの心を動かすアプローチ方法

●体幹を鍛える活動

・平均台を使用し、さまざまな体の動きを体験し、体幹に刺激を与えていく

●足腰を鍛える活動

・三輪車をこぐことで、足腰を効率的に鍛える

●腕支持を強化する活動

・運動棒や鉄棒、登り棒を使用し、腕の力を強化する

●持久力をつける活動

・全身を使い、静と動のバランスをつけながら体を動かして遊ぶ



5 研究のまとめ（研究成果）

コロナ禍が続いているため、従来の遊びや運動がいままでのように取り組めていない。そのような中、運動遊びを通して、効率よく体を動かし、心と体を育むにはどのようなプログラムですすめていくことが良いかと検討を重ねていた。今回の研究はそのような背景がきっかけで始まった。

体育指導講師の長井篤先生は、以前より当園で体育指導に来ていただいている。そのため子どもたちも長井先生を信頼し、喜んで体育指導を受けている。

体の基礎となる「基礎体力」とはどのようなものかを、講義を通じて職員間で共通認識を行った。基礎体力とは、「歩く」「走る」「登る」「下りる」など、普段から使う力、基本的な体の動きのことである。それらを育み、礎となる活動の実践、研究に取り組んだ。

・体幹を鍛える活動

平均台4台を使用し、「またぐ」「ゆっくり歩く」「くぐる」等の動きを通して、さまざまな子どもの姿が見られた。体幹が弱い子どもは、「足元を見ながら歩く」「手でバランスをとる」特徴がみられた。恐怖心も相まっていとは感じるが、普段より体をふらつかせることが多い子どもが、そのような特徴をみせていた。又年長児は腹筋と背筋を無意識に使える竹馬に挑戦することで達成感と集中力が高まる効果が期待できる。

・足腰を鍛える活動

三輪車をこぎ始める「一歩目」がでにくいようだった。足や腰に力をいれながら、こぎ姿勢に意識するよう声をかけると、スムーズにできるようになっていた。立ちこぎをする際も、重心移動が難しく苦心していた子どもたちだった。この活動を繰り返すことで、自然と力の入れ方もわかるようになり、重心移動をさせることも習得できていた。

・腕支持を強化する

平行棒2本を平行に並べ縦に3本連ねる。その上を「くま歩き」で渡る。平らなところでのくま歩きより、腕や足に強度がかかっていた。子どもたちも慎重に進んでいた。その他、鉄棒を使用し腕支持や逆上がり、足かけまわり、前回りにつなげた。腕の力をつけることで、鉄棒技にもスムーズに移行することができた。またできるようになると普段から鉄棒に触れる機会が自然と増え、遊びの幅が広がっている。

・持久力をつける

「走る」「止まる」「早く歩く」「ゆっくり歩く」「ジャンプをする」「ダンスをする」など、さまざまな動きをルールに則って行った。音楽に合わせることで体を楽しく動かせることができていた。体を動かすことがしんどいと感じることより、楽しいと感じられるとおのずから活動し、体も鍛えられていく。

これらの活動を通じて、信頼できる大人のサポートがあれば意欲的に活動に参加し、体を動かすことを心から楽しむことができていた。コロナ禍で従来通りの活動が思うようにできない状況でも、子どもの課題に向き合うことができる。課題に特化した方法での運動遊びや体のさまざまな部分を使った運動遊び、ルールがある運動遊びなどバリエーションを広げることができる。その時々に応じた運動遊びが展開する。

6 課題

- ・自由遊びをしている中にも、自由に運動遊びが楽しめる環境作りが必要である。
- ・運動遊びを通して心を開放したり、心から楽しむ活動ができるように、子ども主体で展開できる運動遊びを今後も研究を重ねていく。
- ・子どもが苦手と感じる動きでも、楽しみながら運動を取り組めるよう提供していく。
- ・運動遊びに取り組んでいる過程を大切にし、その様子の深く観察していく。

令和3年度 調査研究事業（研究報告）

1 施設名

長居保育園

2 研究テーマ

医療的ケア児との生活を通してインクルーシブ保育の原点に立ち返り実践に繋げる。

3 研究内容

（1）実施期間

2021/4/1～2022/3/31

（2）講師の所属・役職・氏名等

インクルーシブ（共生）教育研究所 代表 堀智晴先生

大阪聖和保育園 事務局長 森本宮仁子先生

（3）研究のねらい

心が行き交う経験を通じて、大人も子どもも共に育ちあう保育を目指す。

（4）研究対象児童

長居保育園在園児

（5）指導計画

別紙参照

4 実践内容

1. 普段の保育をビデオに撮り、子どもの姿から、インクルーシブ保育とは何かを学ぶ。
2. 本人とその家族も交えて、研修を行う。インクルーシブ保育の基本から、毎日の保育とどう繋げていくかを学ぶ。



5 研究のまとめ（研究成果）

今年度、この研究のために6回の研修を予定していたが、新型コロナウイルスの蔓延により、研修を4回も中止せざるを得ず、また本児が数か月間、園に通えなかったために、思うように実践することができなかつたのが、非常に残念である。

しかし、研究を通じてインクルーシブ保育とは何かを、実際の保育を見直した中で気づくことができ、保育を再構築する方向へ進みつつあることは大きな成果である。

2回目の研修では、本児とその家族も同席した。

保護者の出産時の出来事、そのことによる母親の受けた精神的ショック、家族の生活の変容、当園に繋がるまでの経緯、現在の日々の生活を聞かせてもらった。

そのことを知らなかった職員が話を聞き、感心が高まったことから、支援とは、まず状況を知ろうとし、想像することから始まるのだと感じた。

また、障がいの名前は、子どもの情報の一つである。その情報をもとに関りや援助方法の手がかりにはなるが、その子ども自身を分かろうとすることが最も大切である。保育現場は医療機関や療育ではない、子どもの育ちに最もふさわしい空間である保育の現場にいる人間同士、大人も子どもも共に育ち合うという視点が必要であることを再認識した。

研修会としては、2回しか実現しなかつたが、堀先生の講義や実際に子どもに関わっておられる姿や、森本先生の保育に対する理念から、同じ空間にいるだけでは、インクルーシブ保育とは言えず、共に心と心を通わせること、通っていると信じて話しかけ、触れ、相手の気持ちを想像して考えてみる、共に生きていく豊かさは人と人とが実際に関わり合うこと以外からは生まれえないということを学んだ。

様々な環境で育つ子どもと家族を受け入れていきたい気持ちがあり、これまでも受け入れ模索しながら保育を進めてきていたが、保育の理念、方向性や実際に行っている方法等をしっかりと見つめ直すことができた。障害のあるなしにかかわらず、誰もが、排除されることなく自分らしさを保ちながら、生きていける社会を、これからも子どもたちと共に実現していきたい。

6 課題

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、思うように進められなかつたので、今回の研究をもとにして、これからの保育の中で、具体的な経験を通して、育ちあえる保育を形にしていきたいと思う。